

砧教会役員会御中

まず、2022年12月18日の役員会報告時に普及させてしまい、複数の方に不愉快な思いをさせてしまいましたことをお詫びします。しかしながら、事実は事実として、役員会が誠実に審議し、誰が見ても納得ができるような形で決議をまとめていただくよう重ねてお願いさせていただけます。

12月18日に繰り返し、会堂再開はなかったと金井美彦氏、佐分利正彦氏とも主張されましたが、添付のGmailのプリントアウトにあるように、金井美彦氏は2021年5月29日に「昨年6月7日に会堂閉鎖を一時的に解いたのは確かです。」とその理由も含めて書かれています。これは明らかに2022年12月18日の主張と矛盾しています。

加えて、添付の裁判資料として提出されたメールでも、佐分利氏は教会学校を翌週に再開すると宣言しており、再会基準を守る意志がなかったことも明らかです。また、金井氏も試験的であれば問題ないと、前日の時点で会堂閉鎖を解く意思が明確だったのにも関わらず、お二人共繰り返し会堂再開はなかったと主張し、事実を受け入れることはありませんでした。

事実は事実として、金井美彦氏は2020年6月7日の会堂再開を認め、総会に総会決議に反する行動があったこと、その事実を指摘した萩原の主張を弾圧したこと、総会決議に反する行動があったのに総会に報告することを怠ったことを報告し謝罪していただくことを求めます。

佐分利氏は2022年12月18日に総会決議に反しても牧師が会堂再開すると判断したらそれで良いと主張されました。萩原も個人的にはその考え方に賛同しますが、書記の職責にあったものとしては、それは事実が適正に開示された上で、総会で是非を判断するのが筋だと言わざるを得ません。総会決議違反はあったのです。主文の内容を覆すのは、「委細は牧師に一任」が仮に全体にかかっていたとしても主文の否定は委細の範囲に入ると勝手に判断することはできません。

萩原は砧教会が真実に忠実に運営される教会であることを心より望んでおり、再び現住陪餐会員に復帰することを本心から願っています。事実でないことを事実と認めてしまえば私にとって砧教会は真実に忠実に運営される教会で無くなってしまいますので、引くことはできません。もちろん、萩原が根本的に何か勘違いしておかしなことを主張している可能性は否定できません。その場合は、上記の主張の不適切性を明らかにする回答を文書をもって行っていただきたく願います。

金井美彦氏が真実に忠実になっていただければ、萩原が牧師とは認められないと言っている根拠もなくなります。民事裁判で和解を選んだのは、金井美彦氏、佐分利正彦氏が「今後の運営に当たり、教会の規則をはじめとする手続きを遵守してこれを行う」と約束

されたためです。真実に忠実に役員会を含む教会運営が適切に行われることを期待しています。ただし、私が牧師として認めるか認めないかは関係なく、総会決議に反する行動があったのに報告を怠ったのは会員に対する背信行為ですから、進退伺いを提示するのは当然と考えます。牧師に真実があれば当然信任が得られるものと考えます。一方、書記の職責にありながら事実を曲げた佐分利正彦氏に関しては書記不適格と考えざるを得ません。適格性について役員会でご審議いただきたくお願いします。また、役員会からの2つの郵送文書には複数の矛盾点が含まれています。再精査して、事実と反する部分については、訂正をお願いします。

母萩原正子、妹萩原友子は既に転会を終え、新しい信仰生活を始めているので手遅れですが、妻萩原朝恵を含め、誠意をもって事実を伝え、特に妻の教会への復帰を牧師、役員会から奨めていただきたいと希望します。

メールと発言の矛盾から考えても、現在の金井美彦氏は現実に向かい合うことのできない精神状態にあるように思われます。事実を求める声を排除することで教会を正常化することはできるとは思えません。金井美彦氏におかれましては、もし、過去に間違いがあったのであれば、それを正した上で堂々と前を向いて進んでいただきたいと希望しています。

以上

2022年12月19日

萩原高行

参考までに、当日の公開日記 (Blog) も添付します。



(件名なし)

saiko hoshizora <evangeligaudium1959@gmail.com>
To: Takayuki HAGIHARA <hagi@acm.org>

2021年5月29日 14:33

萩原高行さま

お便りありがとうございました。メールはやはり誤解を生みますね。わたしは、萩原さんの昨年の怒りと攻撃を深刻な衝撃として覚えています。ですから、あなたのメールをすべて警戒しており、過剰に反応しているかもしれません。この点、お詫びします。しばらく休むつもりでしたが、やはり応答しておきたいと思います。

萩原さんのお気持ちはよくわかりました。前向きに行きたいと改めて思っています。

ただ、誤解というか認識違いを確認しなくてはなりません。昨年6月7日に会堂閉鎖を一時的に解いたのは確かです。ただし、これは私の独断ではなく、萩原さんも含めた役員全員の了解がありました。つまり、会堂に私とオルガニストがいるというのは会堂閉鎖を解いたということです。萩原さんは私とオルガニスト以外が入った（正確には佐分利さんが入った）ことをもって閉鎖を解いて決議を破ったと考えているようです。わたしは、牧師とオルガニストがいるということですのでに閉鎖の解除は前提とみて、もしもの場合に備えたのでした。そして礼拝中止連絡の不行き届きの人が入るのはやむ無しとしたのです。

決議は絶対だから違反というのはひとつの考えとしてはわかりますが、これは正確には牧師・役員会の権限で決議を一時停止したということです。あなから見たら破ったとなりますが、当時の状況からこれを牧師の独断による違反として糾弾することにだれも賛同は示しませんでした。なお、ホームページの記事が世間への約束と契約だとか、まったく思いません。

あらためてまとめますと、私の理解は、昨年6月7日は萩原さんも含め会堂閉鎖を一時解除する同意があった。要するに牧師および役員会の権限で先の総会決議を一時停止した。このことは認めます。

以上のことをあなたの視点から決議違反として糾弾するのは自由です。しかし、そうと決めつけ、あたかも犯罪の告白をせよと要求するのは、あまりに行き過ぎと感じます。わたしは、すでに前にも述べたように、今回の決議は法ではなく、教会のコロナ対応方針を決めたのであったと考えておりました。それを尊重しつつ、役員の方々の同意も得ながら状況のなかで一時停止しただけのことを、決議違反と決めつけ、認めないなら脅してでも認めさせるというやり方でご自身の満足を求めることに恐怖と怒りを感じました。

ついに、あなたは決議の一時停止を法律違反と断じてし、これを罪として認めない限り、私の牧師資格を剥奪するとまで宣言されたのです。この時点で全て終わりました。何を言っても無駄であるとかんねんしたのです。

以上、私が理解するこれまでの経緯の一部と私の正直な思いを書きました。総会決議をめぐる理解が当時はまったく違ったことがきっかけですが、今はそれが明らかになり、おおよその理解の一致ができたことを幸いに思います。そして、萩原さんもご自身の行き過ぎをお詫びされています。私も萩原さんをあれほどに怒らせるような教会運営となったことは自分の足らなさであつと思ひ、この点はお詫びしたいと思います。

さらに、萩原さんとおおよその理解の一致があったこと、萩原さんが現住陪餐への復帰を望んでおられることを役員会に正式に報告し、手はずを整えるつもりです。萩原さんの願いにこたえることができたかはわかりませんが、あらためて一言書かせていただきました。

金井美彦

2021年5月28日(金) 13:01 Takayuki HAGIHARA <hagi@acm.org>:

金井美彦様

メールありがとうございました。

困難なことは承知の上、冷静に話を尽くせば、どこでなぜ信頼関係が壊れたかが判明することを期待して、正直に自分の思いをお伝えしました。感情的にぶつきたいからということではなく、現時点で私がどういう状態にあるかをお伝えした次第です。不快に思われたのであれば、お詫びします。お詫びばかりで申し訳ありません。自分としては、感情的にならないようがないが、教会も見直した上でお送りしております。

もちろん、金井美彦様が私の現実を冷静に受け取ることができないということであればお送りしたこと自身が失敗です。

ご指摘のように、当初は総会決議違反だから会堂再開はやめて下さいと申し上げたものの、お聞き入れいただけなかったことで感情的になり、激しい中傷や脅しの言葉をお送りしてしまったのは事実です。その点は、金井美彦様がお許しになるか否かを全てお決めいただけることで、私ができることはそれらの行為について謝罪して許しを請うことだけです。改めて心中よりお詫びします。

「それでも、あのような深刻な中傷や恫喝はあってはならないと思っていますが。」は真にもっともなご指摘だと思います。私の欠けの一つであり、そういう行動を取ってしまう自分を恥じております。本件だけでなく、私の長患いです。

許されなくて当然ですが、許してもらえなければ行き止まりです。ですから、あえてお願いします。どうかお許しください。虫の良い申出であることは重々承知しておりますが、どうかお許しくださいと言わせて下さい。祐教会との関わりは金井美彦様次第です。他に道はあるかも知れませんが、恐らく公式に2020年6月7日は総会決議に反する行動を取りましたと告白していただくところに戻る意思が生まれなければ現状を打破できないでしょう。他の道があるかも知れないと思って経緯を辿ろうと思いましたがご希望にそえず申し訳ありませんでした。決して糾弾の意図はありません。出口を探るための提案だったのです。

現実的な問題として、現住陪餐会員への復帰は審議されるのでしょうか？

その道が閉ざされるのであれば、私は別の道を考えなければいけません。もちろん、母とも相談しないとはいけません。しばしば祐教会と高行のために祈っていますとメールを送ってくれる母のことを思うと永遠に待ち続けることはできません。でも、待つしか無いのだということは理解しています。

金井美彦様が顔と顔をあわせて話すのでないと先に進めないということであれば、安全を保ちつつ何らかの方法を考えるという道もあるかと思ひます。母は昨年ペンテコステの時点で私に役員であろうと感染のリスクを犯してこの時期に教会に行くのはやめてほしいと私に求めました（私は数値が落ちているので会堂が再開されれば行く気でいました）。父が施設に入っていたということもあると思いますが、まず命を大事にしてもらいたいとその時も今も願っていることと理解しています。母は、牧師がやりたいと言えれば会堂再開はしょうがないが、教会に人を集めることを今も適切とは考えていません（恐らくそう考えているのは母だけではありません）。当然、金井美彦様にはリスクがあると考えており、私が対面で会うことを喜ばないと思ひます。しかし、そうしないと前に進まないのであれば、何か方法を考えないとはいけません。私自身は、必要な冷却期間をはさみつつ書簡の往復を続けるやり方を好みます。過去の誤りを確認しつつ進めることができるからです。

いずれにしても、理解に関する合意に至れたことは感謝しております。これまでのご尽力に御礼申し上げます。そして、私はまだ共に歩む未来への希望を捨てておりません。返信をお待ちします。ただ、どうか、お急ぎにならないで下さい。共に歩む未来を目指すときからは、金井美彦様のことはほぼ毎日寝る前の祈りに含めています。まあ、夜中に目が覚めて眠れなくなる日も時折あり、正直挫けそうになる日もありますが、祈りとともに進める所存です。

総会決議違反の指摘は、本当に総会決議違反はだめだと思って申し上げたことです。私が知る範囲で言えば、そりゃあ総会決議違反と言われればそうだけど、牧師がそういうのだったらしょうがないんじゃないのという意見が多かったと思ひます。多分、母も妻も同じ意見だと思います。私も、もし当時の立場になかったら、あえて

今日砧教会の現住陪餐会員復帰が無い旨の通知を受けた

hagi が 2022/12/18(日) - 14:46 に投稿

今日砧教会の現住陪餐会員復帰が無い旨の通知を受けた。まあ予想通りと言えなくはないのだが、本心から復帰を望んでいたのが残念に思う。元はと言えば、私は当時書記だったので、牧師やもう一人の書記が総会決議に反していたことを指摘しないわけにはいかなかったところに起因している。総会決議に反する行動を取ってはいけないと言ったわけではない。総会決議に反する行動があればそれを正直に認めて、必要があったから総会決議を超える判断をしたと言って総会の承認を取れば良いのに、それを牧師ともう一人の書記がなかったことにしようとし、他の役員もなかったことにする側に立ってしまったのでこじれてしまった。逆側から見れば、何難癖つけてるんだということになるのだろうが、何度考えても私にはごまかして良いことだとは思えないのだ。それは権力者の横暴と思えるからで、権力者の横暴を許すと組織が腐るからだ。金井氏はあなたには砧教会では何の権利もない、もう終わったのだと宣言した。最後にもう一度 1 月に役員会で相談すると言って踏みとどまったのは救いである。まだ完全に終わったわけではない。

さまざまな応酬はあって荒れたが、2021 年 3 月 26 日から再び金井氏と理解のすり合わせを始めた。読んでいただければわかると期待するが、私は本心から信頼回復を願っている。教会における総会の位置づけなどの理解がずれているかも知れないと考え、個々の事象の前に理解の土台の共通化を目指した。無論、私自身が間違っている可能性は高いので、丁寧に筋を確認した。決して誘導したり罾を張ったりしてはいない。

いろいろあったが、2021 年 5 月 29 日に金井氏は

昨年6月7日に会堂閉鎖を一時的に解いたのは確かです

と書いた。「総会決議を一時停止した」と明言している。この時点で 2 人が食い違っているのは、金井氏は「萩原さんも含めた役員全員の了解がありました」から総会決議違反にあたらないと考えていることと、総会決議に反する行動があったのは事実だから総会決議違反だが、総会決議を超えて判断してもよいが総会決議に反する行動があったことを総会に説明して会員の理解を得る必要があるという萩原の考えだ。繰り返すが、言質を取るために誘導したりしてはいない。私が真実だと思うことを訴え続けているうちに事実を認めていただいたシーンに過ぎない。

金井氏は総会決議違反と言われることと犯罪者扱いされたと受け取っているが、私は総会決議違反は単なる事実過ぎない、疑義が出ればその是非は総会で決めれば良いと言っている。つまり、事実を明らかにすることを拒むことは会員への背信行為に当たる。総会議事録を見ても閉鎖基準を守らなかったことは明らかな事実だ。裁量権を認めたとしても、主文に反することがあったのは明白で委細の問題とは言えない。私には、その事実をごまかすことはできない。

私は、今も心から砧教会への復帰を心から望んでいるし、同時に事実をごまかすことはできない。黙っていることはできない。

再び金井氏とのやり取りに戻ると、金井氏は 2021 年 5 月 29 日のメールで「総会決議をめぐる理解が当時はまったく違ったことがきっかけですが、今はそれが明らかになり、おおよその理解の一致ができたことを幸いに思います」と書いている。その内容の一致は、2021 年 5 月 24 日にまとめられている。

ポイントは「3. 牧師あるいは役員会が異なる判断を下した場合でも総会決議は有効で、無効化を含め決議内容を変更するためには新たな総会決議が必要である。」だ。これが総会決議の共通理解であれば、2020 年 6 月 7 日の礼拝は「牧師あるいは役員会が異なる判断を下した場合」にあたる。

決して糾弾することや論争に勝つことは目的ではない。事実を指摘する信徒の主張をごまかすような牧師であっては困る。牧師も無謬ではないという前提を忘れず「1. 総会決議は教会の総意である」に忠実であって欲しいと願っている。だから、金井氏が会堂再開がなかったと無謬性にこだわり続ける限り、この問題が決着する日は来ないだろう。

牧師と教会員の関係は結構流動的なものだ。砧教会の歴史の中でも、事実上解任になったケースはある。風向きが変われば会員の支持がなくなることもある。個々の役員の評価も変わる。私物化が疑われるようになって引退につながったケースもある。個人的には、それらのケースで牧師や役員が不誠実だったとは思っていない。総会や役員選挙で示される民意は風に流されるから、教会員自身が目を覚ましている状況にいななければならない。

金井氏は、今日会衆の前でもう信頼回復はありえないと宣言した。私は、今でも信頼回復は可能だと信じているし、その向こうに新たな道が開けると信じている。下手くそだから2021年5月29日のようにわずかに光が見えたと思っても、その道を壊してしまったのだろう。それでも、私はおかしなことを主張しているとは全く思っていないが、上手な人なら、牧師に教会で会衆を前にもう信頼回復はありえないなどと言わせて恥をかかせたりはしないだろう。自分の未熟さに打ちのめされる気持ちになる。私の視点では十分に不義の証拠は揃っているが、勝つことが目的なのではない。しかし、排除されてしまうと勝つか道が無くなってしまう。求めている信頼回復と復帰から遠ざかってしまう。

※引用しているリンクは2021年6月26日の教会の会合(オンライン)で金井氏から口頭で書簡のやりとりの公開は差し支えないと合意を得ているので掲載。

差出人: saiko hoshizora

件名: Re: 教会の掲示について

日付: 2020年6月6日 18:23

宛先: 佐分利 正彦

そうでした。今週は会堂にいけなかったので訂正しそびれました。明日朝に急遽訂正版を作って掲示します。来ていただいた方は、入っていただく他ないと思います。

それと、喪葬の件ですが、萩原さんが外部にたいして問題なのではとの強いご指摘がありました。試験的なものの位置付けなので最小限なら問題ないとおもうのですが、やや気が重いです。

金井美彦

2020年6月6日(土) 18:08 佐分利 正彦 <>:

金井先生

色々、ご面倒をおかけします。

さて、さきほど午後4時頃に、週報の印刷のために教会に行っていました。すると、教会の掲示板と入口ドアに「6月7日から礼拝を行う」ことを書いた掲示がそのまま残っていました。つまり、教会からの一般向けの情報提供としては、

「明日は10時半から礼拝を行う」

ことになっているということです。

ホームページと掲示と、どちらが優先するかと言うことは別にして、対外的には「6月7日に礼拝を行う」ことは訂正されたとは言いきれないと思います。

私としては、教会学校のこともあるので、明日は9時過ぎから教会に行くつもりです。先ほど君に電話をしたところ、昨日から学校が始まったそうです。他のキリスト教系の学校もおそらく動き出していることと思います。君には、教会学校は来週から始めるとつたえました。しかし、掲示を見たGSの新しい生徒がもしかすると来るかと思い、念のためにまいます。

なお、上記の掲示はあえてそのまま残してきました。

佐分利正彦